



NPOマイクロネシア振興協会ニュース マイクロネシア カセレーリエ

(1/4)

目次

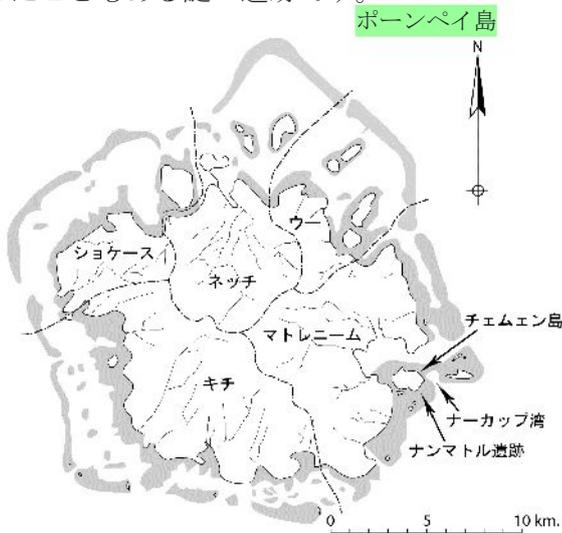
- 1. 新世界遺産・ナンマトル遺跡(特集連載 4回シリーズのその1) ……
特別寄稿: NPO法人パシフィカ・ルネサンス代表理事 長岡拓也氏 (AMD顧問)
- 2. NPO AMDの最新ニュース
- 3. ミクロネシア連邦とパラオ共和国を訪れた人々……………NPO AMD事務局長 川嶋正和
- 4. 私たちNPOのこれからの予定

新世界遺産・ナンマトル遺跡

NPO法人パシフィカ・ルネサンス
代表理事 長岡拓也 (AMD顧問)

1. ナンマトル遺跡とは

ミクロネシアに浮かぶポーンペイ島にある巨石遺跡、ナンマトル(注)は、その壮大さ・特異さから太平洋に沈んだムー大陸の一部ではないか、また外来者が築いたのではないかと言われたこともある謎の遺跡です。



最近の考古学調査によりこうした説は否定され、遺跡の概要が明らかになってきていますが、マングローブの森の中にかくされ、ポーンペイ人が聖なる場所と考えているこの神秘的な遺跡は、まだ多くの謎に包まれています。

私達、NPO法人パシフィカ・ルネサンスは、2014年の設立以来ナンマトル遺跡が世界遺産に登録されるようにミクロネシア連邦政府に対し

て技術支援を行ってきましたが、ついに今年7月に登録が決定しました。これから4回にわたって、1. ナンマトル遺跡とは、2. 島の歴史の中でのナンマトル、3. 世界遺産登録と今後の課題、4. ナンマトルとは何だったかについて書いてみたいと思います。

ナンマトル遺跡は、ポーンペイ島東南部にあるチャムエン島のサンゴ礁の浅瀬の上の約1.5x0.7kmの長方形の範囲に、玄武岩を積み上げて100以上の人口島が建設された古代の海上都市です。この遺跡は、シャウテレル王朝が全島を治めていた西暦1200年から1500年までの約300年間、島の政治・宗教の中心となりました。ナンマトルは「太平洋のベニス」と呼ばれることもあるように、満潮時は人工島の間の水路をカヌーで行き来してました。

ナンマトル遺跡 (世界遺産推薦書をもとに作図)





ミクロネシア カセレーリエ

ナントワス島

(2/4)

建設に使われている島で産出される火山系の玄武岩は、摂理により自然に五角形や六角形の長細い柱状に割れています。数トンの石が遺跡の壁に使われているのにくわえ、50～60トンの大型の石が基礎の部分に多く使われています。

遺跡で最大の90トンにもなる巨大な石は10メートル近くまで積み上げられています。最近の研究によると、こうした石材は島中から運ばれてきたことがわかっていますが、どのように運んだか、どのように石組みを積み上げたかなど詳しいことはわかりません。

広大な海上都市ナンマトルは、貿易風の風向きである東西の軸に沿って、大まかに東西2地区に分けられています。風上である東側の上ナンマトルは司祭者の居住区で、有名なナントワス島にはシャウテレウル王の墓が築かれています。一方、風下である西側の下ナンマトルは政治の中心だったと伝えられており、その中核となるパーンケティラ島には王宮や19 x 37mの巨大な神殿が築かれていました。また東西2地区の外洋側には防波堤となる人工島が建設されており、それらの人工島の上には多くの墳墓が築かれています。この墳墓の立地は、死者の魂は海底の世界に行くという



伝統的な思想に基づくと考えられます。

ナンマトルでは、それぞれの人口島には、王族や司祭者の居住域・祭祀場・墳墓などさまざまな機能があったと伝えられています。ナンマトルという名前は、「～の間」という意味で、本来は「家々の間」であったと言われており、シャウテレウル王の居城であった時代には、王族と彼らに仕える司祭者や従者の家々が人工島の上に立ち並び、栄えていた様子がうかがえます。

(注) これまででは一般的に「ナンマドル」と呼ばれていましたが、今後はポーンペイ語の発音に従って「ナンマトル」とされる予定です。

μ

μ

μ

2. NPO AMDの最新ニュース

＜ミクロネシア連邦との架け橋となる会＞＜在日ミクロネシア連邦大使館＞＜NPOミクロネシア振興協会 略称NPO AMD＞の共催で毎年開催され、本年も「フレンドシップ第9回国際交流会」が開催されました。 2016年10月17日源氏山CC



7:30 交流会 開会式



ミクロネシア連邦 駐日ジョンフリッツ大使